

## 指定理由書

種 別	有形文化財 彫刻
名 称	木造十一面観音菩薩立像 (もくぞうじゅういちめんかんのんぼさつりゅうぞう)
員 数	1 軀
所 在 地	春日井市白山町9丁目1番地
所 有 者	宗教法人円福寺
法 量	本体像高 54.8 cm、総高 80.0 cm
時 代	平安時代 11世紀

## 品質及び構造

ヒノキ材。一木造。現状素地。彫眼。頂上仏面、頂上面、両手首先、左足先、両天衣垂下部欠失。鼻先、右足先、台座、光背は後補。

## 形状

左手を屈臂して、右手は垂下させ、腰を左に捻り、顔と腹部を前に突き出す姿勢で台座上に立つ。頭上の十一面は亡失し、宝髻の上と天冠台の上に柄穴のみが残る。光背（後補）は円光。台座（後補）は蓮の葉の形をあらわした荷葉座の上に蓮華座を置く。

正面に一カ所、背面に二カ所の節があり、霊木から彫り出したものと思われる。

## 由来及び沿革

円福寺は天台宗の別格本山で、勝嶽山と号し、白山神社が隣接している。明治の神仏分離までは、円福寺が白山神社の別当職をつとめていた。

『尾州白山寺縁起』などによると、円福寺の創建は養老七年（723）のことで、中世には七堂伽藍、子院十二坊を構えた。天正年間の火災により多くを焼失するが、難を免れた宝物が今に残る。

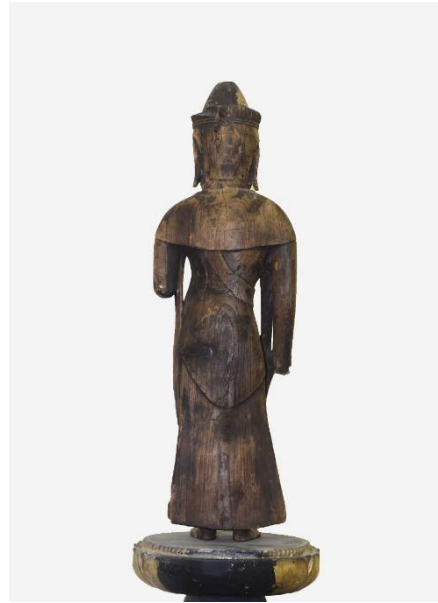
## 指定理由

白山（石川県、岐阜県にまたがる山）への信仰は古くからあり、白山の山岳信仰と修験道が融合した神仏習合の神が白山権現（白山妙理権現）であり、その本地仏が十一面観音菩薩であった。本像もまた、隣接する白山神社に祀る神の本地仏として造立されたものであろう。本像とともに伝来する僧形坐像と女神坐像も白山信仰に基づく造像と考えられる。平安時代に遡る同信仰の遺例がまとまった形で伝来するのは貴重であり、この地に白山の神を勧請した時期や、円福寺と白山神社との関係を考えるうえでも重要な像である。以上から、本像を市文化財に指定し、後世に大切に伝えていくことが望まれる。

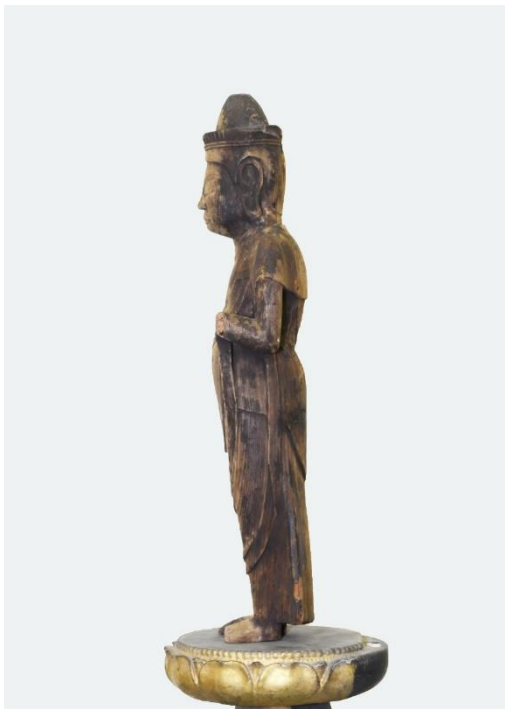
木造十一面觀音菩薩立像写真



全身正面



背面



左側面



頭部

## 指定理由書

種 別	有形文化財 彫刻
名 称	木造僧形坐像（もくぞうそうぎょうざぞう）
員 数	1 軀
所 在 地	春日井市白山町9丁目1番地
所 有 者	宗教法人円福寺
法 量	本体像高 29.5 cm
時 代	平安時代 11世紀

## 品質及び構造

ヒノキ材。一木造。現状素地。彫眼。両手首先欠失。台座後補。

## 形状

両手を下ろして臂を軽く曲げて前に出し、跏趺坐する。頭部は剃髪し、円頂無冠の僧形。顔はやや厳しい表情にあらわされる。

目鼻口の造形や、顔にやや厳しさをのこす表情、また像の量感を減じた側面観などは、同寺に伝わる十一面観音菩薩立像と大変よく似ている。また節の多い木を用いている点も共通していることから、僧形坐像の制作年代は十一面観音菩薩像とほぼ同時期であると推測される。同じ霊木から彫り出された可能性も考えられよう。

## 由来及び沿革

円福寺は天台宗の別格本山で、勝嶽山と号し、白山神社が隣接している。明治の神仏分離までは、円福寺が白山神社の別当職をつとめていた。

『尾州白山寺縁起』などによると、円福寺の創建は養老七年（723）のことで、中世には七堂伽藍、子院十二坊を構えた。天正年間の火災により多くを焼失したが、難を免れた宝物が今に残る。

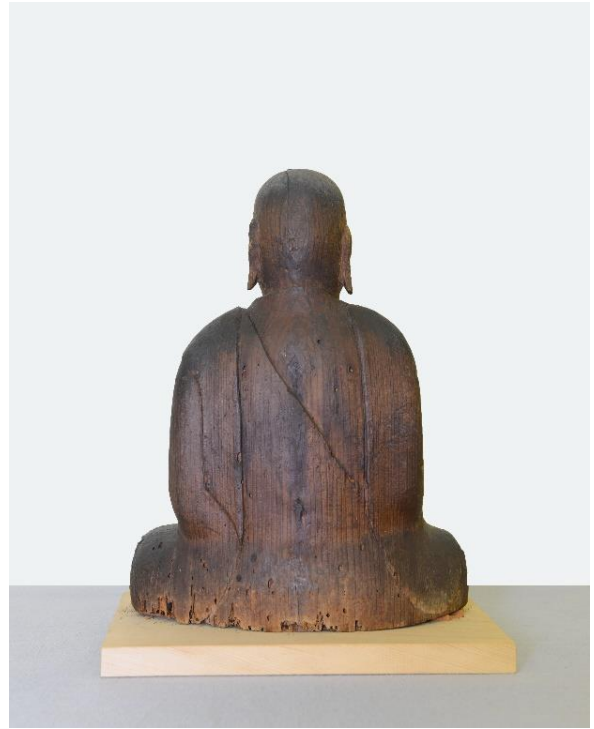
## 指定理由

本像は円福寺に隣接する白山神社に祀られた僧形神像と推測され、ともに伝来する十一面観音菩薩立像と女神坐像もまた白山信仰に基づく造像と考えられる。平安時代に遡る同信仰の遺例がまとまった形で伝来するのは貴重であり、この地に白山の神を勧請した時期や、円福寺と白山神社との関係を考えるうえでも重要な像である。以上から、本像を市文化財に指定し後世に大切に伝えていくことが望まれる。

木造僧形坐像写真



全身正面



背面



右斜側面



左側面

## 指定理由書

種 別	有形文化財 彫刻
名 称	木造女神坐像（もくぞうじょしんざぞう）
員 数	1 軀
所 在 地	春日井市白山町9丁目1番地
所 有 者	宗教法人円福寺
法 量	本体像高 32.8 cm
時 代	平安時代 12世紀

## 品質及び構造

ヒノキ材。一木造。現状素地。彫眼。全体に虫損、風化が著しい。台座、後補。

## 形状

長髪を肩まで垂らし、右足を立膝とする姿勢で坐す女神像。右手は屈臂して立てた右膝の上に置くか。顔はふっくらとした丸顔。全体に虫損・風化が著しく、これ以上の像容は不明。

右肩と背面左寄りに大きな節があることから、十一面観音菩薩立像、僧形坐像と同様に、霊木から彫り出されたものと考えられる。

## 由来及び沿革

円福寺は天台宗の別格本山で、勝嶽山と号し、白山神社が隣接している。明治の神仏分離までは、円福寺が白山神社の別当職をつとめていた。

『尾州白山寺縁起』などによると、円福寺の創建は養老七年（723）のことで、中世には七堂伽藍、子院十二坊を構えた。天正年間の火災により多くを焼失したが、難を免れた宝物が今に残る。

本像は八百比丘尼像として伝来した像であるが、八百比丘尼伝説それ自体が江戸期以降の史料にしか見えないことから、本来は白山神社に祀られた神像として造立されたものであろう。

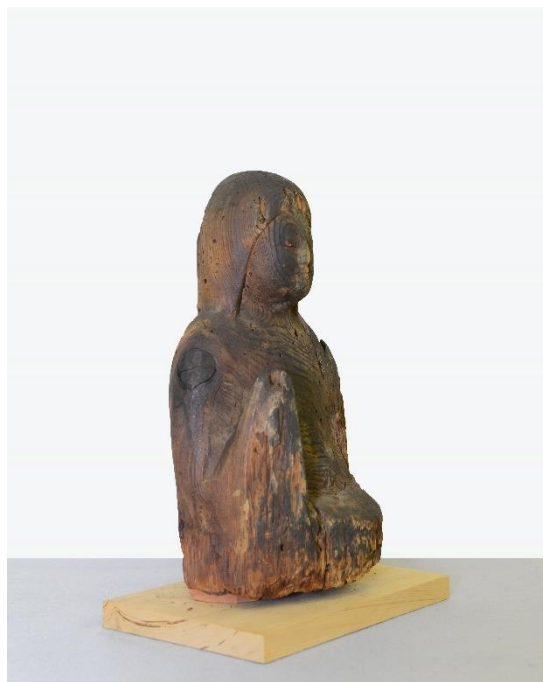
## 指定理由

本像は円福寺に隣接する白山神社に祀られた神像と推測され、ともに伝来する十一面観音菩薩立像と僧形坐像もまた白山信仰に基づく造像と考えられる。平安時代に遡る同信仰の遺例がまとまった形で伝来するのは貴重であり、この地に白山の神を勧請した時期や、円福寺と白山神社との関係を考えるうえでも重要な像である。以上から、本像を市文化財に指定し後世に大切に伝えていくことが望まれる。

木造女神坐像写真



全身正面



右斜側面



背面



左側面